

授業グレードアップ! Vol. 4

"地図" を授業に活かす ～中学地理「世界の諸地域」アフリカ州③～

『中学校学習指導要領解説 社会編』には、アフリカ州の学習における主題を「モノカルチャー経済下の人々の生活」とした場合、「第一次産品にたよるアフリカ諸国の人々は、どのような生活をしているのか」という問いを立てて追究し、アフリカの脆弱な経済基盤とその理由を明らかにしてアフリカの地域的特色の理解につなげる、というおおよその学習イメージが示されています。

今回は、地図を活用した活動から、モノカルチャー経済下におけるアフリカの物流網の問題を捉え、アフリカ経済の発展について考える実践例を紹介します。

〈地図活用〉アフリカの国の数と内陸国の数を調べさせる。

アフリカには54もの国があります。一地域としては最も多くの国があります。しかも、アフリカには海を持たない内陸国が16もあります。

アフリカは「大きい」「国の数も多い」

しかも「内陸国が多い」



この捉えが、アフリカの経済発展について考える上で大事な「空間軸」となります。

中学校教科書『新しい社会 地理』（東京書籍）に、次の記述があります。

アフリカの多くの国では、わずかな種類の商品作物や鉱山資源を輸出して経済が成り立っています。（下線は筆者）

このことが何を意味するのか。それは、物流網の整備が、アフリカの経済成長の力を握っているということです。つまり、道路や鉄道、沿岸の港等が整備され、国境を越えた物流網ができないと、アフリカの経済は動かないのです。

ところが、アフリカの鉄道は老朽化が激しく、自動車が走る道路の多くは未舗装のままなど、整備が非常に遅れています。そのことが、アフリカの経済が停滞する要因の一つになっています。物流網は、国を身体に例えるならば血管です。すばらしい身体をもっている、血管がつまっていたら健康ではられません。アフリカという広大な土地で生産活動を営む上では、物流網の整備は重要な課題です。

内陸国は、港を持たないため、あらゆる貿易品に物流コストが乗ってきます。すると物価が高くなります。物価が高くなるのに伴って様々な問題を引き起こします。貿易という面では、地勢的に欧州からもアジアからも遠い中央アフリカ諸国は、特に不利と言えます。

『中学校学習指導要領解説 社会編』では、世界の諸地域の学習における主題設定の配慮について、次のように述べています。

「各州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それを基に主題を設け」る必要がある。また、「我が国の国土の認識を深める上で効果的であるという観点から設定すること」(内容の取扱い)とあることから、我が国との比較や関連を図る視点をもって主題を設定することや、「州ごとに異なるものとなるようにすること」(内容の取扱い)によって、世界の諸地域の人々の生活の様子を様々な面から理解できるように配慮する必要がある。(下線は筆者)

このことを踏まえて、授業では、アフリカのモノカルチャー経済と我が国との関連を、次のように図っていきます。

アフリカの国々でつくられているモノカルチャーによる産品を、日本を含めた多くの国々が輸入していることを理解させることで、自分たちの生活とアフリカの人々の生活が密接に関わっていることに気付かせる。

日本から約1万キロメートル以上の遠方にあるアフリカは、日本人にとってなかなか親しみを持ちにくいかもしれませんが、実はわたしたちの生活の中にも「アフリカ」をたくさん見つけることができます。例えば、日本の食卓になじみの深い、バナナ豆、カカオ豆、タコといった食料品の大半はアフリカから輸入されています。また、日本の先端産業に不可欠な素材であるレアメタルの多くをアフリカから輸入しています。その他、蚊取り線香に使われる除虫菊もアフリカから輸入しています。

アフリカと日本が、貿易を通して密接につながっていることを気付かせた後で、内陸国が多いアフリカの経済がより発展していくために必要なことを、生徒たちに考えさせます。その際、我が国がアフリカのためにできることについてもぜひ考えさせたいものです。

教科書『新しい社会 地理』(東京書籍)には、このことに関わる次の記述があります。

アフリカの産業は、農業や豊富な資源をもとにした鉱業が中心ですが、おもに輸出向けとなっています。しかし、輸送や開発のための技術は欧米諸国や中国、日本にたよっています。(下線は筆者)

欧米諸国や中国、
日本にたよらない
ためにはどうすれば
よいのかな…



内陸国同士がお互いに
連携・協力し合えば、
効率的に貿易が行える
のではないかな。

「アフリカは、農業や鉱業を中心にどのように自立をめざしていくとよいのか」「我が国はアフリカ諸国の自立のためにどのような援助をすればよいのか」等について考えさせることで、国際社会の発展に努力しようとする態度を養うことができるでしょう。

地図や地球儀を活用することで、社会的事象を空間的な広がりの中で捉えさせることができます。授業で、地図や地球儀をぜひ活用してください。

